

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『くれよんのくろくん』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

兼行 稀莉香・嶋本 友里・田中 彩火

寺園 稜太・中島 涼香・中山 遥・長谷川 桃花

原口 彩音・山田妃向子・吉武 冴

題材とした絵本：『くれよんのくろくん』

文：なかやみわ 絵：なかやみわ 出版：童心社

発行日：2001年10月

タイトル：『くれよんのくろくん』

実践準備の担当：プロデューサー（吉武 冴）、衣装（嶋本 友里）、小道具（寺園 稜太）、音楽（山田 妃向子）、脚本（中山 遥、原口彩音）、記録・報告書（中島 涼香、長谷川桃花）、会計（兼行 稀莉香、田中 彩火）

実践時の担当：あかくれよん（兼行 稀莉香）、きいろくれよん（長谷川 桃花）、おれんじくれよん（嶋本 友里）、みどりくれよん（吉武 冴）、あおくれよん（中山 遥）、pinkくれよん（原口 彩音）、むらさきくれよん（田中 彩火）、くろくれよん（寺園 稜太）音・演奏（山田 妃向子）、カメラ・音響（中島 涼香）

1. 題材『くれよんのくろくん』選定の理由

『くれよんのくろくん』の絵本のストーリーは、それぞれのくれよんの色を通してその色でしか表せない物や気持ち、表現がある。それをみんなで話し合う中で一人ひとりの個性が目に見え、絵を通して自分の個性や相手の個性を見つけることができるストーリーである。この絵本の特徴は他人と一緒になくても良いこと、自分の活躍できる場所があること、そして相手の気持ちを考えることのできる部分であると思う。

5歳児に適していると考えた理由は、5歳児の特徴としてお互いにぶつかり合いながら”どうしたら良いのか”自分たちで考え日々学びながら成長したり、相手の気持ちを考えながらお互いに納得いくようにコミュニケーションを取ることが少しずつできるようになるため適していると考えた。友だちや周りの大人との関わりから、自分の気持ちを伝え相手の気持ちも受け止め、個性があるからこそ素敵な物ができるし協力することでよりすばらしいものができることを伝えたいと思った。

子ども達は、日常の中で、自分自身の描きたい絵を自分の思うように描く機会が多いと思う。その時に描きたい絵を描き塗りたいいろで塗ることを子ども達の個性と捉え、子ども達の想像力を育むことの出来る保育者になりたいと感じた。

（執筆者：田中 彩火）

2. 絵本の世界から遊びへの展開

活動の詳細が決まる前は、絵本の中に様々な色のクレヨンが出てくることから、色に着目して遊びを展開させようと考えた。水に絵の具を入れ色の変化を楽しむ色水遊びやクレヨンを削りカップに入れて湯煎で溶かして作るオリジナルクレヨン作り、ボディペイントなどを考えた。

子ども達は、色を他のものに入れたり、混ぜた色同士をまた混ぜることによって生じる変化などに興味を持ち色彩感覚が育つのではないかと思った。同時に「なぜこれを混ぜるとこの色になるのか?」「この色を作るにはどうしたら良いか?」などの疑問を色遊びを通じて持つことにより、科学に対する興味を養うこともできると感じた。今回のこども劇場はリモートということもあり一緒に活動する形が難しかったが、こども劇場以外でこの絵本を基に活動するのであれば、上記の遊びの展開はとても良いのではないかと思った。

劇の中での遊びは、最初、様々な色で絵を描いた後それをくろのくれよんで塗りつぶしスクラッチ技法を使ってあまり人気がないと思われるくろいろの良さを伝えるという遊びを展開しようと思っていた。しかし今回のこども劇場では"一つ一つの色の良さ"や"個性"を伝えたかったため、くろいろに限らず他の色もそれぞれがそのまま輝ける演出に変更した。最終的にそれぞれのくれよんたちが子ども達に『この色でどんなものが描けるかな?』と声をかけ、一緒に体を使って表現したりくれよんでイラストを描いたりするという遊びの形をとった。子ども達は私達が想像もしていなかったようなものを提案してくれたり全力で表現してくれたり、とても活動を楽しんでくれているように感じた。

(執筆者：吉武 冨)

3.実践に際して大切にしたこと

実践に際して大切にすることは以下の2つである。

①子どもたちにどのような表現をできるか考えてもらい、自分の表現を自由にできることを知り、仲間たちと考え楽しむことを味わってもらいたのしんでもらえるように考えた。自分なりに表現することを言葉にして体で表してみるとどんな感じかな?と子どもたちに問いかけることで実際に子どもたちが表現しやすくなるような環境づくりを行った。次に実践している中でおっきなモノを表現するとき子どもたちが自分たち自身で声かけを行いみんなで形を作りだそうと自ら集まりだしたときに私たちが考えていた「みんなで表現する楽しさを味わって欲しい」という体験に繋がっていたのでよかった。最初の私たちの本番に向けての話し合いの際は、くれよんのくろくんの絵本のストーリー通りにする予定だったが話し合いでくろくんだけ最初は人気がない役だったがやっぱり子どもたちにもお互いの表現することを認めあって欲しいということをもみんなで考え、くろくんも最初から書けるものがあって1人1人に魅力があるとわかってもらえるようなストーリー展開にして表現しようと考えた。実践し私たちが〇色でどんなのが書けるかな?と問いかけることで子どもたちの意見を聞きいれ自分たちの意見をみんなが聞いてくれて楽しんでいると思ってもらえるようにと実践した。私たちが子どもたちに対してできることは

お互いを認め合い楽しい環境で伸び伸びと過ごしてもらおうこと。偏見を持たず真っ直ぐ素直にいれるようになってもらうことだと思った。そして子どもたちが大きくなってたくさんの人と関わる時互いを認め合い柔軟な考えが出来る大人になり次の子どもたちにも良いことを受け継いでいけるような社会になってほしいと思った。なので私たちは幼教こども劇場を通して子どもたちに協力し合うこと、表現は自由なこと、自分以外を認め合うこと、の大切さを伝えることができたのではないかなと思った。伝えることは難しいが絵本を題材にすることで伝えやすく分かりやすくすることができたと思う。

(執筆者：長谷川 桃花)

4.内容について

(1) 全体の構成

『くれよんのくろくん』のあらすじとしてはくれよん達が真っ白な画用紙を見つけ色々な色で色々なものを描いていく。その中でくろくんだけ仲間に入れてもらえず何も描けずにい

た。そんなくろくにシャーペンさんが寄り添い、秘策を教えてくれる。くれよん達が描いた画用紙はくろくんの色に染まりシャーペンさんが削ることで素敵な花火が出来上がり、それぞれの個性の違いを活かした物語になっている。

今回の構成としては、絵本のあらすじに捉われず個々の個性を活かすということをイメージして構成を作り上げた。まず初めに導入として、"みなさんリズム"を行った。導入で身体を使って表現をすることを楽しみ本題でも活かせるように意識した。本題に入り、実際にくれよんのケースからくれよん達が出てくるということで子どもたちの興味を引き出し、"どんな色が好き"を歌うという方向に持っていった。子ども達の反応として「くれよんがいる！すごい」と興味を示していた。

そして絵本ではくろくんが仲間外れになってしまっていたが、実際に行った劇では「あかでかけるものは何があるか」や表現をするということで「りんごはどのような形をしているかな、身体で表現してみよう」と子ども達を問いかけることで子ども達もさまざまな形を自分なりに表現することができていた。赤色、黄色、青色、などでどんなものが描けるか、それをどう表現できるかを実際に子ども達と考えることで私達が子ども達に気づいて欲しい"個性を大切にしよう"というテーマに基づくことができたと感じた。

最後に子どもたちの所へ画用紙を届け「あか、きいろ、みどり、色々な色を使って絵を描いてみてね」と声掛けを行った。

(執筆者：中山 遥)

(2) 子どもたちとの対話について

子ども達との対話、コミュニケーションについては子ども達に「あかいろの物は何があるかな」と問いかけ、手を挙げた子を指名をして答えてもらい、その後みんなで体を使って表現してもらおうという形をとった。子ども達に「あかい物って何があるかな？」と問いかけた時にみんな一斉に話して聞き取れないかもしれないと思ったため指名の形をとった。私は次の色に行った時にもう一度ルールを説明しないと分からないのでは、と思ったが子ども達は質問の内容が分かっているに当てられる前にみんな手をあげて「はい！」と元気よく返事をして答えてくれていた。みんな自分の意見を思い思いに伝え楽しそうに参加してくれていたのが良かったと思う。

また子ども達の意見を画用紙に描いたり一緒に体を使って表現したりと繋がっているということを感じてもらえるように工夫した。また明るい声かけや問いかけを意識し、「上手だね」「いいねそんなものもあるね」と声をかけた。自分が伝えた物が絵として描かれていたり表現の仕方を褒めてもらえたりすると子ども達はとても嬉しそうに笑顔を見せていた。

一色ずつやりとりをしていく中で時間が足りず最後の方は3色一緒に出て子ども達に問いかけを行った。もっとスムーズにやりとりが出来ていたらなと思ったが途中で機転をきかせて3人で出たのは良かったと思う。予想していなかった物が出てきて焦ってしまい反応に困ってしまう部分もあったため、臨機応変に対応できるように事前準備を細かくしておくべきだったなと感じた。初めは緊張から控えめだった子ども達も後半になるにつれて体を大きく使って楽しそうに表現している姿を見れて嬉しかった。子ども達と楽しくやりとりしながら行うことができ子ども達の楽しそうな姿を見れて頑張った良かったなと思った。

(執筆者：兼行 稀莉香)

(3) 表現の工夫

クレヨンと紙を使い、子ども達がゆったものをその場で描き最後にみんなで見せ合うという演出を行った。子どもたちが言ったものをその場で描くときに園マークが来ると思ってなくどうしようってなってしまったから、事前に調べておくべきだったと思った。

また、そのゆったものを身体で表現してみたと声掛けをし、バナナだったりリンゴだったり子どもたちなりに考え表現していた。その際、1人ではどうしても難しいものは2人で協力したりこちらが声掛けしなくても子どもたち自身で色々考え表現している姿が見られた。

カメラワークでは、3台のカメラを使用した為、切り替えが追いつかない部分や近寄ったり、遠のいたりする所が甘くなっていたと思う。

さらに、絵本をカメラに映すときは光を消したり、紙の時はつけたりと見やすいように工夫を行った。

絵に書きおこす際には、絵とくれよん（人）を同時に映し、喋っている人と絵で何がかけたかが子どもたちに分かるよう画面をふたつにして行った。そうすることで、子どもたちがゆったものが実際に書いてあるということを実感できたと思う。

（執筆者：中島 涼香）

（4）音と音楽

くれよん達の登場シーンの際、最初の考えでは何も音を付けずくれよんの蓋の表紙を倒すという計画だったが実際にやってみた時、「いつ倒すべきなのか分からない」「タイミングが合わない」などの意見が出た結果、音があった方がタイミングも掴みやすく、子ども達にもワクワクして見てもらえるように音をつけることになった。

音は高い音でのピアノ伴奏を行った。音を高い音にしたのにも工夫があり、ピアノの真ん中の音だと協調性がなくくれよんの登場に合っていないと思った。また低い音はくれよんの登場に恐怖感、怖さを与えてしまうような音に聞こえてしまい物語に合わないと思った。高い音では明るい雰囲気にも包まれたような感じがしたり、くれよんの登場に興味や関心が湧くような音になり、登場シーンでの音に合っていると感じたので登場シーンでは高い音で伴奏することになった。またくれよんの蓋の表紙を倒すタイミングが分かりやすいように和音を使った伴奏にも心掛けた。

次に「どんな色が好き」を歌う場面では、最初はCDプレイヤーやスマートフォンの方から音を流す予定だったが、生で演奏する方が子ども達もより楽しめると思ったので実際にピアノの伴奏を入れ、私たちが音楽に触れ楽しんだように子ども達にも音楽の楽しさをオンラインで楽しんで貰えるようにピアノの伴奏を入れることになった。ピアノ伴奏の楽譜はインターネットで検索し、その検索結果から出た楽譜を元に自分が弾きやすいように改善して伴奏を行った。クレヨンの色が8色あった為、同じ楽譜を8回分弾くことになるので途中で音を外してしまったり、伴奏の途中で暗譜していた楽譜が飛んでしまい止まってしまったことがあった。同じ失敗を繰り返さないためにも学校の授業の空き時間や自宅でのピアノ練習を何度も繰り返し行った。この努力の結果、本番の幼教こども劇場で失敗することなく伴奏を行うことが出来た。また伴奏中でも弾き歌いが出来るようになった。子ども達もピアノの伴奏とくれよん達と一緒に歌う時、楽しそうに体を動かしながら歌ってくれていたのが良かったと思う。

子ども達に音楽に触れ、周りと一緒に歌う楽しさを感じて貰えたと思感じた。

（執筆者：山田 妃向子）

（5）プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

今回、プレ幼教で協力して頂いた園のクラスは少人数であることを事前に知らされていたことで、「一人一人に伝わるように関わる」をより一層力を入れ取り組んだ。

初めて子ども達の前で実践する為、学生も緊張して多少焦っていた部分もあった。その焦りが子ども達にも伝わり、出だしは子どももどう動いたり反応したりすれば良いのか分からない様子だった。しかし、学生がくれよんの歌を楽しく横に揺れながら歌うと、それを見な

がら一緒に歌う子どもの姿が見られた。歌いながら「どんな色が好き？」と問い尋ねると、歌に乗せて「あか！」など大きな声で答えている姿があり、楽しく活動しているように感じられた。

画面に一人の学生が出て、「〇〇色のものって何があるかな？」と聞く時間があり、いきなり歌から質問に移った為、子ども達は少し困惑した様子だった。その姿を見て、本番には、一人一人軽く自己紹介などをして場面の切り替えをハッキリさせることにした。子ども達に色に沿ったものを聞いたあと、それを身体で表す時間をつくった。子ども達は身体を丸めたり両手いっぱい広げたりしながら思い思いに動いていた。学生がその動きを見て気づき触れながら話すと、「私のも見て！」と伝えるように身体をもっと大きく動かしていた。

その後、くろ色だけ描くものが見つからず、くろくんが落ち込む場面がある。しかし、子ども達は、他の色で沢山のを声に出して見つけていた為、くろくんが落ち込む前にくろ色のものを口にしていた。本の題材とは違い、子ども達にとっては、くろくんも他の色と同じように描けるものは沢山あると感じている様子だった。

全体を通して、練習で想定していた流れより、もっと子ども達はのびのびと自分のありのままの考えを口にしていて感じられた為、改善点が複数見つかった。スムーズに劇を通しながら、子ども達の気持ちをなるべく多く聞き出せるように流れを練り直し、一人一人の個性ある考えを尊重できるようにした。

(執筆：嶋本 友里)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

私達が計画した『くれよんのくろくん』について、当初の計画としては“くろ色の個性を子ども達に伝えたい”と考え、絵本通りの設定に囚われすぎていた部分があった。

しかし、先生からの助言を受け、絵本通りにくろくんに囚われすぎずに“全部の色に一つ一つ個性がある”全部の色を好きになってほしい、大切にしてほしい”ということ子ども達に伝えることが一番重要だと考え、計画を大きく見直した。

まずは、恥ずかしがらずくれよんにしっかりとたりきることが子ども達に伝えたいことが伝わりやすくなるのではないかと、また子ども達が『くれよんのくろくん』の劇に入りやすくなり、ワクワク感に繋がるよう促したいと考え、それぞれのくれよんがそれぞれの個性を主張した自己紹介を行うことにした。

当初の計画では、終盤で子ども達に描ける物を聞きながら一緒にそれぞれの色で描いた絵をこちらでくろで塗り潰しスクラッチを行うはずだったが、それぞれの色を使い子ども達の好きな物を描くことを最優先に行った。また、工夫として子ども達とのコミュニケーションを取る機会を増やし、オンラインではあったが関わりを豊かにするため子ども達にそれぞれの色で描ける物を聞いて描くだけでなく、それを全身を使って一緒に表現したりし、子ども達も自分達も一緒に『くれよんのくろくん』を楽しむということも心がけた。そうすることで子ども達はもちろん、自分達も充実感を味わいながら子どもの視点から全力で楽しむことができた。

本番までにプレでの課題点や成果などを自分達なりに分析し明確にして、助言し合ったりした。短い準備期間ではあったがグループ全員で一丸となり話し合いや実践を繰り返すことができたし、協力して結果として自分達が納得いく計画に見直すことができたと感じる。

最後に、私達が子ども達へ伝えなかったこととして、色にはそれぞれ個性があり様々な物を描けるように、人にもそれぞれ個性がある。その個性を大切にすることで素敵な未来が描けるんだ、ということ子ども達に伝わるよう願いながら終始笑顔で幼教こども劇場に取り組むことができた。

(執筆：原口 彩音)

(7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

実践を通して学んだこと、分かったことは子ども達はそれぞれの園や環境によって反応が全く違うということだ。私たちは『くれよんのくろくん』という題材をもとに作品を制作してきたが発表までに何度も試行錯誤を繰り返し作り直してきた。合計でリモートでの発表を2回行ったがそれぞれ内容は少し違うものだった。どうすれば子ども達が楽しんでくれるのか、画面越しに一緒に活動をしたり出来るのか考えた。1回目の実践ではくろくんが1人使われないというストーリーで進め子ども達に問いかけ絵が出来た喜びを子ども達と共有した。2回目の発表では全員が主役というような形で活動に入りそれぞれ個人で子ども達とリモートでのやり取りを行った。最後に子ども達が言ったものを描いた絵をみんなに見せることでいろいろな絵が描けたことを伝えた。

子ども達はどの色にも楽しそうな反応を示し活動を楽しんでいる様子が伺えた。体を使って食べ物や身の回りにある物を一生懸命表現していて私達もとても楽しく実践することが出来た。だが、時間配分が難しく2回目の実践の際にアドリブでやってしまったところがありまだまだ改善の余地があったと思った。また、子ども達への声掛け、作品のストーリーなどをもう少し変えてみての実践もしてみたかった。

(執筆者：寺園 稜太)

5. 取り組みを通して学んだこと、得たこと

【原口 彩音】

幼教こども劇場では、私達が企画したものが子ども達の素敵な思い出の一つとなるようグループ全体で協力し、何度も試行錯誤を重ねながら本番まで準備を進めた。

実際に『くれよんのくろくん』を企画しながら学んだことは、子ども達が日々見ている絵本には子どもの成長において大切にしなければならないこと、大人からしても学びになることが絵本にはたくさん秘められていることに改めて気付くことができ、貴重な学びとなった。

『くれよんのくろくん』においての子ども達に大切にしてほしいことは、“自分や周りの人の個性を大切にしてほしい”“たくさん色に親しみを持ってこれからもたくさん絵を描いて楽しんでほしい”“身体で何かを表現し、想像力や表現力を豊かにしてほしい”などであった。これらを大切にしてほしいと願いを込めて取り組むことができた。

その反面、保育者側からの願いを子ども達に気付いてもらう大切だが、それだけでなく子どもの視点から保育者への願いに気付くことも重要だと改めて感じた。準備を進めながらそのことをきちんと再認識し、子ども達の視点で物事を考え、子ども達が全力で楽しめることは何かを第一に考え実践することができた。幼教こども劇場での経験を基に、学んだこと、得たことをきちんと自分の中で吸収し現場での保育に活用していきたい。

【吉武 冴】

今回の幼教こども劇場を通じて改めて子ども達の想像力のすごさに気づくことができた。私たちは“この色はあまり人気がないだろう”“子ども達もこの色で描けるものをあまり思い付かないだろう”と決めつけ、自分たちの狭げられた想像だけで物事を考え当然子ども達もその中から提案してくるだろうと考えていた。

しかし実践の際の子ども達は、尽きることなくそれぞれの色に対してイメージするものを伝えてくれた。あまり人気がないだろうと思いつかないだろうと思っていたむらさきやくろいでも、「テレビ」「カメラ」などと私達が想像していた以上にたくさん教えてくれた。同じ場所において同じ景色を見ている、私達にとっては見慣れてしまっていて特に何も感じることはない変わり映えのない景色かもしれないが、子ども達は毎回着眼点が違ったり小さなことでも日々多くのことを発見しているのだなと感じた。そして改めて自分の色に対する固定観

念に気づくこともできた。また活動の中に子ども達に身につけて欲しい保育者のねらいがあるだろうが、それを重要視しすぎず子ども達が楽しいと感じ全力で遊ぶことのできる環境や遊びを考えその延長線上に保育者のねらいがあるという考え方を忘れないようにしたいと思った。

【長谷川桃花】

今回行った幼教こども劇場を通じての一番の学びは、私たちが伝えたいことが伝わるかどうかは私たち次第だけど子どもたちに伝わったときに、正しく伝えることができたのかが大切になってくると思った。私たちが実践した「くれよんのくろくん」のストーリー展開は最初からくろくんの魅力が無いと決めつけていて最終的にはみんなで考えたらそれぞれに良いところがあってみんな違ってみんないいといったストーリーで終わるが、最初のくろくに魅力が無いという決めつけで仲間に入れないくろくんは、現代の私たちにも共通している偏見からだ実際に幼教こども劇場を行っていて感じた。なぜなら、私たちがそれぞれの色で絵を書くときに子どもたちに何が書けるか教えてほしいと問いかけていた際、子どもたちはくろくんの黒色に対してすぐにパッと黒色で書けるものを教えてくれた。それは子どもたちが日常の中で沢山のものを見ていて子どもたちの観察力の凄さもあるがどんなものに対しても良いところを探すことができる素敵なことができる子どもたちを前に私は子どもたちが子どもたちなりに成長していて偏見などがなく何事にも真っ直ぐに考えられていて、絵本を通して子どもたちの心の成長に繋がっているように感じた。私たちが保育者としてこれから絵本を読んでいくことは子どもたちに良くも悪くも影響するというのを改めて学ぶことができたので、これから活かしていきたいと思った。

【田中彩火】

今回の幼教こども劇場を通して、『くれよんのくろくん』のくれよんのいろが違うからこそ活かし方も見え方も違い、それぞれが持っている魅力を合わせたからこそ素敵な作品ができたストーリーのように一人ひとりの個性がありグループのみんなと繰り返し試行錯誤しコミュニケーションを取りながら作品を作ることができた。子ども達は、いろいろ考える物を言葉として伝えたり体で表現したりしてひとつひとつに違いがあるからこそ良さがあることを実際に体で表現しながら子ども達が楽しかったと思ってもらえるような作品になるように考えた。

実際に子ども達を前に劇をした時、いろいろイメージする物を伝えてくれて物を体で表現している姿を見ることができた。おれんじいろのミカンでも身体全部を丸めて座っている子どもや、ヘタもつけている子ども、手で丸を表現している子どもを、ミカンが転がっていることをイメージしてクルクルと回っている子どもがいて一人ひとりの表現力をいっしょに見ることができた。

劇のストーリーは初めくろくんだけ使われずくろくんの魅力をみんなで見つけるストーリーにしていたが、他の色の魅力もあるからこそ他の色も子どもたちと一緒に探し表現したり、それぞれの違いがあるからこそその良さを伝えることができるストーリーにした。このストーリーにしたことで、子どもたちは同じ物や形の物はあるかもしれないけれど、目に見た時の見え方は違って、これもひとつの良さになったと思う。

保育者になった際には、子どもの描きたい絵や形を思いのまま表現してもらい保育者として受け止めていきたい。みんな違うからこそ素敵なものができる絵だねとお互いに伝えることができて、“上手”“下手”にとらわれないような保育にしていきたい。

【兼行稀莉香】

今回幼教こども劇場をやってみて子ども達がどうしたら楽しんでくれるか考えるのは難しかったが皆でアイディアを出し合いながらより良いものに出ることが出来て協力することの大切さや意見を出し合い皆で進めていくことの大切さを改めて学ぶことができた。

子ども達の反応がどう返ってくるか分からないから本番までドキドキで色んな予想を立てて対応出来る様にしていた。だが予想外の反応が返ってきて臨機応変に対応する事の大変さや難しさや面白さを味わうことができた。子ども達の発想力の豊かさを感じることができた。本番までの準備はとても大変だったが子ども達の楽しそうな姿や子ども達が描いてくれた絵を見た時にとても嬉しくて頑張ってたよかったです。

今回はクレヨンのくろくんから遊びを発展させていったので次は違う本や別の遊びへと発展させて子どもの発想力を引き出していきたいなと思った。絵本から色んな遊びに繋げていけると知ったのでこの経験を忘れずに就職してからもいかせるようにしたいなと思った。

【中山 遥】

今回、『くれよんのくろくん』を題材にして子ども達に"個性を大切にする"ということ伝えるためにグループで試行錯誤しながら劇に取り組んだ。プレではくれよんのくろがみんなに人気がない、くろでかけるもの何があるかなど子ども達に尋ねていたがそれまでの流れで子ども達は「くろはテレビとかパソコンとかカメラがある」と色々な意見が出てきた。プレは最後までやり遂げたが改善として子ども達は表現力が豊かであるためくろでも色々なものが描けるとわかったため本番では他の色と同様にくろでも何が描けるか、どう表現するかを聞くというようにした。実際に本番では子ども達に「あかでかけるものなにがあるかな、それをどうやって身体で表現する」と問いかけることで子ども達とコミュニケーションを取ることができた。子ども達の表現力はとても個性が溢れており私達も見ているととても楽しかった。子ども達と投げかけをしていると全色が一人ずつ出るという設定だったが時間を押してしまいピンク、むらさき、くろが3色一気に出るようになった。時間は押してしまったが臨機応変に対応し無事に成功させることができたため達成感も充実感も味わうことができた。

【山田 妃向子】

幼教こども劇場を実際に行ってみて、初めは「本当に自分達でできるのか」「どのようにして完成に導くか」などとたくさんの不安があった。だが、同じグループのみんなと協力し、意見交換をしたり、企画の変更点の話し合いだったり長い時間一緒に関わりを得て、記憶に残るような『くれよんのくろくん』が完成した。たくさんの変更点や準備の時間、全体を通した練習で大変なことをあつたが誰一人欠けることなく最後までやりきれたのも、グループのみんな一人一人の努力の結晶だと思う。また私は伴奏を行ってみて、音楽をどのようにして子ども達に楽しんでもらうか、子ども達が歌いやすいようにするにはどうしたらいいのかを考えることが出来た。

幼教こども劇場を終えて学んだことは、子どもの想像力の豊かさを改めて実感することが出来た。最初の企画では絵本通りの物語を元に劇を考えていたが実際にプレ幼教こども劇場でやってみた時、絵本では「くろで書ける絵がなくて、最終的にスクラッチをして完結」だったが子ども達から「テレビ」「パソコン」「のり」「カメラ」「カラス」などとたくさんの意見が出て子どもの想像性が豊かだと改めて実感することができた。プレ幼教こども劇場からの体験を生かし、新しく改善された『くれよんのくろくん』が完成することが出来た。子ども達の表現の良さ、想像力を実際に感じ学ぶことが出来た。この体験で感じたことを実際に保育の場に出た時に生かすことが出来たらいいなと思う。

【嶋本 友里】

今回の幼教こども劇場を通して、子ども達に伝える側に立った時、一番子どもから学ぶことができたことは、「発想力」だ。事前練習では、「こんなものが出るかもね」と話し合い

を練っていたが、プレ幼教では想定していた子どもの姿より、沢山色に沿ったものの名前が出てきた。予想がつかないものの名前が出てきたりして、対応が難しい時もあったが、臨機応変に対応して楽しく時間を過ごすことができた。

事前準備では、衣装の作成に携わった。カラービニールの枚数や担当のくれよんの色にも気をつけながら製作した。子ども側から見ても、何色か分かるように白色のテープで服に色の名前を付けるなどして製作をした。

本番では、子どもとの対話を意識しながら取り組んだ。「〇〇色は何がある？」と質問したら、各自思い思いのものを沢山声にして発言していた。その想定以上の発言をする姿を見て、子どもらしい発想力とのびのびした自由さに触れ合う経験ができた。

とても子どもを通して貴重な体験ができて良かった。

【寺園 稜太】

自分たちで作品を決め、「クレヨンのクロくん」で作品を作りはじめ最初はストーリーにのっとったもので考えていたがリモートでの実践、また紙を園に送るなどの時間が必要だったため少しアレンジしたもので実践を行った。

幼教子ども劇場を通して学んだことは子ども達の自由な発想や表現を子ども達が楽しめるように引きだすことが大切だということだ。作品の実践練習の中で子ども達が言うであろう食べ物や身の回りの物を予想し練習をしてきたがいざ本番になると思っていたものやそれもあつたなというものが次から次へと出てきてとても驚かされた。子ども達はその時その時でいろいろなことを考え目に見えるもの聞こえるものを表現していた。私たちが考えたものだけではやはり子ども達の自由な表現は引き出せなかったのだと思った。子ども達の自由な発想を引きだすためとして「クレヨンのクロくん」はとてもいい題材だと思った。色それぞれに個性があり、それを子ども達に教えてもらうことが出来た。

また、実践の後に子ども達がすぐ絵を描き始めたことを聞いてとても嬉しかった。もっとこうしたら良かったという点もあるかもしれないが2回のリモートでの実践はとても楽しくやり切ることができた。

【中島 涼香】

今回行った幼教こども劇場を通じての一番の学びは、子どもたちの想像力が高いということです。

私たちのグループでは、クレヨンの色から連想出来るものを聞き、それを更に身体で表現するというものでお題が[バナナ]だとしたら子どもたちは曲がっているバナナや真っ直ぐなバナナ何本がつながっているバナナなど様々な形のバナナを身体を使って作り出していました。

また、1人ではなかなか難しいものは私たちがとくにヒントを渡さなくても子ども同士で話して2人や3人で協力して作り出している姿を見てとてもすごいなと感じました。

また、色で緑が出た時園のマークが緑ということに気づいて園のマークを友達とどうしたら身体で表現できる考えて上手く園マークを作り出していました。

友達と協力することの大切さや自分で考える大切さを実感できると共に、私たち自身も子どもたちから教えて貰うことができました。

この経験を現場で活かして子どもたちの持っている想像力や力を最大限に引き出すことができる保育者になりたいと思いました。



【作成風景】



【表紙】



【本番の様子】



【子ども達の言葉から描いた絵】